



Vision

高木 都の巻頭言？

高 木 都

独り言：岡田編集・広報幹事から巻頭言の執筆の依頼を受けたが“あまり堅苦しいものでない形”とされているので、その意向に沿ってひとつ軟らかい巻頭言を張り切って書こう。はっきりいえば私が日生誌の巻頭言をかくということ自体が日生誌の変身を遂げつつある状況の反映ではないか。

4年前に将来計画委員会の前委員長近畿大学医学部生理の松尾理先生に依頼され将来計画委員の一人として努めさせて頂いたのが私の生理学会の活動への係り始めだったと思います。それまでは、普通の生理学会会員で評議員でした。委員長の上手な梶取りのもと、委員の中には常任幹事の先生も何人かおられて、その中でずいぶん色々今までの生理学会に感じていたことを、私を始めとして委員の方々がどんどん出していき、松尾理先生がそれを上手にまとめて常任幹事会に提案して行きました。その結果、若手の会の立ち上げ、つい最近の男女共同参画推進委員会の立ち上げ、IUPS招聘の積極的支持等々見る見るうちに成果が上がっていきました。委員同士で話しても「自分たち自身でも信じられないくらい生理学会は変わってきた」という意見が出ます。今後は、生理学の中身自体を魅力的なものにして、ここまで変わってきた生理学会をいかにもり立てて活性化していくかという課題に取り掛かる必要があると思います。

さて、時はすこしさかのほりますが、8月10日、夏真っ盛りに東京で開催された平成14年度第2回常任幹事会からの帰途、西大寺に向かう夜11時ごろの近鉄電車に花火大会でもあったのか、浴衣を着た女性がたくさん乗ってきました。或る女性はひざまでの浴衣、別の女性は帯を身体の前で少し崩したチョウチョに結んだ浴衣、一方では正統派の着こなしをした女性。前の二人の着こなしを見たとき浴衣の着こなしもここまで来たかとショックではありました。が、たまたま、常任幹事会が終わった後にこの風景に遭遇したためかそれがきっかけとなって次のようなことを考えました。

1) 医学の基礎をなす生理学は日本古来の浴衣に相当すると考えれば、色々なあり方があっていいのではないかと思えてきます。学際化により生理学と他の分野との共同研究で新しい分野を築き上げていく。例えば来春の福岡での生理学会生理研連シンポ「再生医学・医療と生理学の接点を探る」は統合生理学の立場から再生医学・医療との接点を探ろうとするものであるし、私が普段モットーとしている「同質は腐敗を呼び、異質は創造を生む」もそういった意味であろうかと思います。一見ぎょっとする着こなしの浴衣でもよーく見るとそれはやはり浴衣なのです。このように、若い人のもつ生理学というイメージは我々の世代とは違うかもしれません。

2) しかし、生理学的なものの見方は研究を進

めるうえで重要なバックボーンだと思います。ポストゲノムの研究の中で重要な位置を占めるのはやはり生理学ではなかろうかと思います。例えば分子生物学的手法に比べると生理学的手法はマニアックだと若い人からよくいわれます。しかし、そのマニアックな所も最近は計測機器もよくなりそれほどでなくなりつつあります。逆にそのマニアックな所が生理学らしいと魅力を感じてくれる若い人が出てくるともっと嬉しいと感じるかもしれません。

3) 欲張りかもしれませんが、学問体系としての生理学はしっかり守りながら、時代に合わせた新しい顔も持つ必要があるのではないのでしょうか？保育園からITに親しんでいる世代が主要な人口を占める時代に生理学は何をなすべきかが問われていると思います。

4) 次に私自身の研究者としての生き方に触れたいと思います。それは、何の為の研究か、誰のための研究か？を考え続ける研究者でありたいということです。今日は9月16日です。あの9月

11日は約1年前です。多くのことを考えさせてくれました。平和であればこそ、私たちは自由に研究に励むことが出来ます。科学研究の成果は平和利用して欲しいものです。人類の健康と福祉のためと言うといかにも大風呂敷を広げたようですが、家族を含む自分の周囲の人たちの顔を思い出し、彼らが支持してくれるような研究は何かを考えるとところから始まるのだらうと思います。

5) 最後に、特に、女性研究者として30年以上を経てきて、色々なことがあって、やっとあまり制約のない研究生活を送れるようになったこの数年は私にとっては貴重です。いわば第3の青春、正念場です。そして、男性、女性の区別なく対等な研究者として協力しあってこの社会に貢献していきたいものだと考えています。研究者社会にあって、相対的弱者(??)である若手、女性研究者の支援を続けていきたいと思います。彼らが生き生きと研究を続けられるような研究者社会であればきっと明るい未来が待ち受けていると思います。